

夢みたいな夢みたい

佐伯実琴

——マツチ棒の軸——

体温を測る

熱が無い

明日、自然現象の何もかもが同時に起きたらいいのと思う
嘘、起きないでね

僕の言葉に意味も何も生まないでね

——マツチ棒の先——

結局僕は冷蔵庫の扉を指先で開け閉めすることはできるのに、その中身を認識することがいつまでもできなくて、新しく清潔な色をした店から毎日事物を運び込むことをしている

物質が状態変化するなら僕の部屋はいつも秋で、嫌な汗をかく夏に取り残されたみたいないな気配と、急いで冬支度をしないとイケないみたいないな気配が同時にして、それで「そもそも今年は『よいお年』だったわけ？」と壁に描いた大きな顔が話しかけてくる

世界が終わりそうな激しい色の夕焼けに窓の外から気づいて「見て！ 世界が終わりそう！」と言っても「本当だね。でも終わらないよ、大丈夫」と社会的にはとっくに大人であるらしい僕に微笑まれる

呆れられたくないから、そこで馬鹿げた話をするのはやめて、じゃあ僕は可燃物じゃないんだって思う

人間は燃えて灰になって人間だったものとされるはずだから、僕は燃えずに、でも消えて、世界から記憶ごとなくなるんだって思う

握る手、掴まれる足、最後の子どもが付けた傷痕、停滞する脈拍、見せないことは罪、電子機器はしぶとく繰り返す、これが悪い夢なら時間を巻き戻す

魔法くらい使えたっていいだろうに、知らない知らない知らない知らない知らない……ってそればかりで

毛布と掛け布団の間に身体を潜り込ませて「一体それは前向きで明るいのか後ろ向きで暗くて落ち込んでいて人を泣かせて傷つけてそれでいて平気な顔で泣いて笑って怒って楽しく生きているのかどっちなわけ？」と壁に描いた大きな顔の唇が動く様子をじっと見ている

見ている

じっと

じっと見ている

「残念、認められないね」

残念、認められなかった

これはマツチ棒

いつ誰が使っても着火する優れもの

おめでとうございます

君の罪はいつだつてそこにある、続いている、絶え間ない、ただ誰も君に近づきたくなかったただだよ

声がする